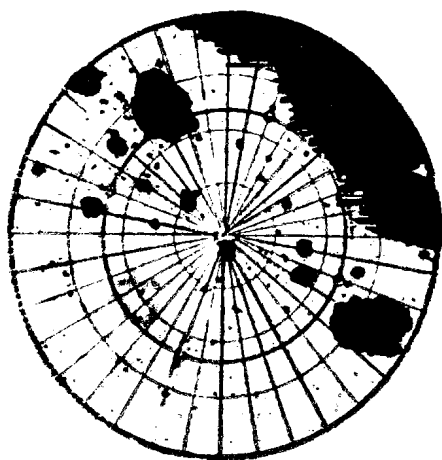




あの夏  
あの海

阿部  
昭



河出書房新社

# あの夏 あの海

昭和四十七年十一月二十日 初版印刷  
昭和四十七年十一月二十五日 初版発行  
定価 八八〇円

著者 阿部昭

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六  
振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七一一

印刷 株式会社文弘社

製本 中西製本印刷株式会社

©1972 AKIRA ABE

I

あの夏あの海 9

鶴沼海岸 13

子供たちの戦争 16

「戦後」という名の悪夢 28

マスールのおもいで 32

父の本箱 35

月夜の浜辺 39

幻の先生 42

II

星よりも下等なもの 47

父をさがす子 58

うらぎる言葉 61

「僕」の問題 64

短い形式 67

書くということ 76

幼年の文学 82

櫻といぬアカシヤ 86

純化された声 93

### Ⅲ

批評家の墓 99

もう一つのドラマ 108

小説の中の「自然」 110

陳腐な運命 117

小説家の死 121

書かれざる序章 126

読めない詩 132

趣味の問題

137

無力な憤懣

141

永遠の朝

145

早熟の苦しみ

153

「安岡語」の世界

158

シンデレラの影

167

背後にわだかまるもの

180

情報の魔

197

#### Ⅳ

野外映画

219

草野球の頃

222

異様なおとなしさ

227

実相寺昭雄の手

231

忘れられない一枚の写真

238

死んだ子供たち

257

千載一遇

260

窓の愉しみ

262

海水浴

265

後記

268

掲載誌・紙一覧

269

装幀 駒井哲郎

口絵写真提供 P P S

エッセイ  
あの夏  
あの海









## あの夏 あの海

夏といい海といい、僕にとってはあまりに生々しく具体的なので、いわば、それについて夢想したりする能力を欠いている。海のそばで育ったからかもしれない。生い立った時代や家庭環境のせいかもしれない。

先日、あるグラフ雑誌で、海軍兵学校卒業記念写真というのを見た。明治六年九月から昭和二十年十月までの卒業者の総数は、一四、四六四名であることもそれで知った。昭和十年代に入ってから年ごとに急増して行く卒業者の数は、日本の運命と呼応している。その数字を眺めながら、僕は多少の感慨を禁じ得なかった。それは、この一四、四六四名のうちに僕の身内の者六名が含まれているからである。父の二人の兄と、父と、兄と、二人の従兄と。

伯父たちは早くに退役したが、父はすこぶる凡庸な指揮官として太平洋戦争を生き残り戦後二十二年目に病死した。大佐であった。従兄の一人は、潜水艦イ11に乗っていたが、昭和十九年二月十七日マーシャル諸島水域で米駆逐艦ニコラスの攻撃をうけて沈没したといわれる。中

尉であった。兄ともう一人の従兄は、再出発するために江田島から帰されてきた。身内にこれだけの「海兵出」がいたことは、いま考えてみれば、やはり異常なことだった。帝国海軍の大きな黒い影が、自分の少年時代を完全におおっていたのは当然だ、と思ひ直した。自分もいずれは江田島へ行くことを信じてうたがわれないといった気分だった。敗戦の夏、僕は満十歳であった。

だから海といえ、それは父や兄たちが守りたかかって敗れた海である。そして、夏はいえ、日本人としてあたりまえのことだろうが、八月十五日ということになるのであろう。その八月十五日を、僕は肩身のせまい軍人のせがれとして迎えた。

兄が江田島から帰ってしばらくして、父が南方の基地から復員してきた。襟章をはぎとった軍服に水筒一本肩にかけて、無一物で玄關に立った父は、ひどく年寄りくさくて、少年の僕を失望させた。まる四年見なかったにしろ、父は老けすぎていた。学校では教師が、野蛮な軍人たちの支配はこれで終り、これからは文化の時代だというようなことを、機会あるごとに説いていた。だがこれは、僕にとつてはすぐには呑みこみにくいことだった。なぜなら、昨日までの僕は、民主主義に早変わりしたその教師よりも「野蛮な軍人」だった父にこそ文化の品位を見ていたからである。少なくとも僕は、その父から若干の文学趣味と語学への興味をうけついで。自分の父親をたえまなく否定してかかってくる戦後の急造の文化に、僕はやすやすとはくみし得なかつた。

そのころ、追放されて職もなかった父は、よく僕をつれて早朝の海岸へ散歩に出かけた。波打際で父と僕はものもいわずに長いことキャッチボールをした。その時分の鶴沼は、まだ美しい砂浜をとどめていた。水がひいたあとには小魚がはねて光った。父は僕を浅瀬に残して、抜き手をきって沖のほうに遠ざかって行った。父と僕のほかだれもない、ひろびろとした朝の海。だが、そのむこうにあるのは、父がもはや二度と出て行くことのない占領下の海であった。

金もなく生活のあてもないこの父の外出に、幼い僕はよくついて歩いた。父といちばん仲がよかった時代だ。そのあと、人並みに僕にも長い反抗期がくる。同じ屋根の下にいながら、口もきかず顔も合わさぬという、あのだれもが経験する青春の辛い日々がくる。しかし、軍人の父は息子に打ち倒される前に、もう十分敗北していたのである。軽薄にアレンジされた軍艦マーチを耳にするにつけ、スクラップのようになって風雨にさらされている日本の軍艦のすがたを映画などで見るにつけ、やはり胸が痛んだ。べつに僕は海軍マニアではないし、帝国海軍は当然ほろぶべくして滅んだのだと思っているが、あのぶざまに横倒しになった穴だらけの廃艦は、どれも亡びてゆく父の姿を思わせた。こうして僕は、生身の父と暮しながら、国が敗れるとはどういうことであるかを学び、否定されつつ生きることをまなんだ。

何の取り柄もない軍人だったが、その父が死んだ日は、やはり僕の生涯の大いなる日だった。へかの日こそ怒りの日、災と艱難の日なれ。げに大いなる日、嘆きの日なるかな。……といふあのレクイエムの言葉は僕の胸を去らなかつた。かの日とは、審判の日のことである。それ

は、連合国および戦後日本によって父が裁かれたということであるが、それだけではない。同時にそれは、裁いた者たちが裁かれる日をこそ呼ぶ声のように聞えたのである。

そうして今年もまた夏がきて、すぐそこで海が鳴っている。すべてがつい昨日のことに思われる。くぐりぬけてきたあの夏あの海をよそにして、どんな夏も海もないような気がする。

## 鵜沼海岸

鵜沼には三十何年、住んでいる。生まれてすぐここに連れてこられたのだから、人心地がついたのもこの海のほとりであった。爾来、おなじ土地内を転々として、いまだに離れられずにいる。それほど好きな土地なのかというと、そうではない。去りがたいという気持の内容は、一口ではいい表わせない。

その間いちばん長くいたのは、いまでは西海岸と呼ばれている字下鰯（しもいわし）という、ごく海に近い一角であった。そこで十数年、波の音を聞きながら少年時代をすごした。その魚くさい地名は、朝な夕な、地引網を曳きに家の前をぞろぞろと通って行った、老若男女の漁師達のことを思い出させる。幼い僕には、あらくれた彼等の半裸姿が、絵本に出てくる赤鬼のように、おそろしかった。

その時分の鵜沼は、そうした半農半漁の土着の住民を除いては、海水浴場のある避暑地であるか、病人をかかえた一家の転地先であった。僕のおやじが昭和の初年に家をたてた頃は、あ



たりいちめんスイカ畠であったという。砂地のせいか、夏は蚤が多かった。

僕の家のすぐそばに「芥川さん」の家があった。その前を通って、僕は幼稚園、小学校（當時は国民学校）、中学、高校と大学の初年までかよった。よく覚えているのは、敗戦前後の二、三年でその界限が僕ら悪童連の遊び場だった頃のことである。

芥川家には、今でも僕は見取図を描くことができるくらいだが、北側の台所と井戸端の上に蔽いかぶさるようにして、天目をさえぎる大きなカシの木があった。その木に登って僕らが五、六人で大枝を揺すり、ドングリの採集に没頭していると、きまって龍之介未亡人が台所から出てこられて、僕らを一喝された。その文子夫人も昨年九月に東京で亡くなられたと聞くが、美貌の持主であるという評判であった。隣組や国防婦人会などというものがあつた時代だから、おふくろや近所の奥さんがそんな噂をしているのが、十歳の小学生の耳にも入っていたのである。残念ながら、いつも睨まれていた僕らには、冷たいような、こわいような小母さんとか記憶がない。芥川さんの家そのものも陰気な感じがした。たぶん、子供心にも、小説家が奥の暗い一室で服毒したかのような、そんな連想が働いていたためであろう。

先年、いまでも担当しているラジオの仕事ではじめて也寸志氏にお目にかかった時、鶴沼の話をした。氏はその頃のことをよく覚えておられて、

——子供のじぶん、毎年夏になると一家そろって鶴沼に行ったが、途中大船の駅で鯛メシを買ってもらって、それを鶴沼の家に着いてから開いてサイダーをのみながら食べるのが、何よ